

新潟・佐渡紀行 (2005年10/11月)

10月29日(土)

朝6時、軽井沢出発、18号線から浅間サンラインに入ると、すぐのところに、遮音壁のある住宅がある。これが別荘ならさぞ大変だろうと話しながら走る。

上田市を通過、更埴インターから上信越自動車道に乗る。沿道の山ウルシやクヌギの紅葉を楽しみながらのんびり走る。先月、群馬県警にやられてから、スピードを出しすぎると高く付くことは身にしみている。

黒姫山や妙高山を左に眺めながら、上越インターで降りる。朝の100km以内は料金半額で済むのがETC最大のメリットだ。朝食が取れそうな店を探しながら、8号線を走る。米山の道の駅近くの魚市場で、にぎり鮭。地魚のにぎりは、はたはた、いしもち、くろだい、ほうぼう、ぶり、まとうだい、ひらめ、たいの8種。はたはた、いしもちは珍しかった。

東電の刈羽原発の脇を通るが煙突の一部が見えるだけだ。海岸を走る352号線で日本海を見ながら、出雲崎を通るころから雨が降り出す。寺泊で、魚市場センターを見物。角上魚類の店は大きい、付け値は高めだ。大きなブリが7000円くらいで売っているのは魅力的だが、今買っても仕方がない。

弥彦山のあたりで雨足は激しくなる。ワイパーを高速で動かすが視界は悪い。新潟市に入って雨は小やみになる。新潟大学の標識を見て、右折し、大学に着いたら、学園祭でにぎわっている。理学部。門で聞くと、もうひとつ先の門が文系というのでそちらに回る。政治経済学・経済史学会秋季学術大会の会場を見つけ、駐車場があることも確認する。個別論題報告がおこなわれている時間だが、今日は不参加。そのまま、外に出て昼食の店をさがす。小料理屋を見つけて、苦労して駐車したが、もう準備中の札。2時を過ぎていたから、昼食営業は終わったようだ。

左右に道が分かれるところで右路線に入ってしまうそのまま右折したが、これは大間違い。南下することになり、大回りをして新潟駅前に着く。東急インの場所を確認してから、昼食に向かうが駐車場の店はなく、三越に車を入れて、食堂街のレストランで遅い昼食。カキのわっぱ飯とレディスランチ(小ぶりのわっぱ飯と小ざるそば)。

4時になったので、東急インにチェックイン。パーキングはタワーで、駐車料金は高い。駅の真ん前だから仕方がない。

昼寝をしてから、恵子を残して6時半頃出発、ホテル・オークラに歩く。懇親会場は、バイキング・レストランを借り切り。受付で伊藤正直さんに明日のコメント・レジュメを渡して印刷を依頼。水割りで懐かしい皆さんと歓談するうちに、開宴。廣田功さんの歓迎挨拶のあと、長老保志恂さんが乾杯挨拶。ラスト講座派らしく、共通論題をもじって「戦争と再生産」をテーマに巧みなスピーチ。

いろいろな人と話ができたが、傑作は、Nさんとの会話。なんと、浅間サンライン入り口の遮音壁別荘の住人は、Nさんとのこと。これにはビックリもしたし、可笑しくなっ

まった。敷地の一部をサンライン用地に売却する羽目になったのだそうだ。

散会后、藤瀬浩司さん伊藤正直さんたちと飲み屋で痛飲快談。11 時過ぎ散会、ホテルに戻る。

10月30日(日)

部屋でパン、オニオン・スープ(一階コンビニで仕入れ)の朝食。コンビニ弁当を持って車で新潟大学へ。駅前からは30分くらいかかるし、駐車場に置いておくと高い料金(400円/時)を取られるので車を使った。

共通論題は「20世紀の戦争と社会変動 - 経済社会秩序と国家介入 - 」。午前は、斉藤叫さん(アメリカ)、雨宮昭彦さん(ドイツ)、廣田功さん(フランス)の報告。

共通論題関係者と昼食。500円のコンビニ弁当を初めて食べたが、結構、美味しかった。

午後は、森武磨さん(日本)の報告、石原俊時さんのスウェーデン中心のコメント。次に、「20世紀を分析する視座」と題しての三和のコメント(後掲レジュメ参照)。

休憩の後、討論。論点は多かったが、三和コメントに関係する部分では、次のような点がだされた。

概念規定についてのコメントで、「国家」は支配・権力構造まで含むかなり複雑な概念だから三和は政策介入の主体としては「政府」を使っていると述べたのに対して、ほぼ皆さん、それを政府・議会・司法・官僚・政党などを含めた歴史概念として使用しているとの回答があった。それはそれで良からうが、理論概念としての国家との違いもはっきりしておかないと、方法概念としての切れ味が悪くなるだろう。

エコロジカルな点からの資本主義批判についてのコメントに対して、廣田さんが、フランスは、対英米独にたいしての立ち遅れ意識が強いので、成長を重視する傾向が強く、エコロジーに関しては、ヨーロッパの中では一番関心の程度は低いと指摘されたのは興味深かった。

司会者団の権上康男さんは、ヨーロッパの「新自由主義」は、制度の枠組みの中での自由を主張する点で、アメリカ的な市場中心主義とは異なっており、市場経済を前提とせざるを得ないとすれば、「新自由主義」が「マイナス成長」の実現に役立つ可能性があると言われた。これは、傾聴に値する見解だ。「マイナス成長」への方法論は、今後、深く考えねばならない課題だ。

保志さんから、三和コメントについて、資本主義の成長要因と戦争との関係を問う質問がだされた。コメントのはじめに、旧土地制度史学会の会員でないのは、保志さんのような怖い人がいたからだとしやべったので反撃された格好だ。所有・社会的剰余・再生産の調整機構の3点から成長要因を略述して、戦争は生産力の発達を促進する点で、成長に関係しているとお答えした。保志さんの全人類的土地所有の考え方を伺いたいと反質問をしたが、これは、言葉足らずだった。

成長要因を裏読みすればマイナス成長の条件になるのだから、所有関係では、私的所有を共同体的所有に再反転させることによってマイナス成長が可能になるはずであり、その時

に、全人類的所有概念は有効性を発揮するのではないかというのが、反質問の主旨だった。保志さんは、別れ際に、コメントが良かったと評価の言葉を掛けてくださった。土地制度史学会の発足時には、現状変革への強烈な意思が学問研究の底を流れていたのに較べると、当今の学会では、いささか些末な論点にこだわりすぎる研究が多いことを、保志さんは、苦々しく感じて居られたに違いない。ラスト講座派、健在なり。

司会者団のひとりの柳沢遊さんは、旧土地制度史学会以来、段階論的な発想を重視しない傾向があり、資本主義没落論は論じられても、資本主義高度成長論、その原因論は軽んじられてきたと指摘しておられた。鋭い見方だ。

昨夜、藤瀬さん、伊藤さんたちと、学会活性化の方法を話したとき、酔った勢いで、学会名をマルクス経済学・経済史学会に改めれば良いと言った。半分は本音で、社会主義没落で消沈してしまうようなマルクス経済学ではなく、現代においてこそ必要な、資本主義批判の学としてのマルクス経済学の再生、馬場宏二ならマルクス経済学の「生き方」の再確認がおこなわれなければ、真の意味での学会の活性化はできない。

いろいろ考えることの多い学会参加であった。

夜は、ガイド地図の「うまくて安い」料理屋を駅前で見つけたが見つからず、横道の寿司屋に入って、刺身盛り合わせと上にぎり、朝日山2合。中味の割には高い支払だった。

10月31日(月)

ホテルの部屋で、クロワッサンの朝食。電話で、佐渡汽船に乗船可能性を確認してから出発。小雨のなか、カーフェリー乗り場に。乗船待ち車列に並んでから、車検証持参で、切符を買う。4.75mの車長なので、料金は往復で28260円(1人分乗船料込み)、1人分往復料金が4120円。

9時半出航。新潟港に目立ったコンテナ・ヤードがないのを不思議に思いながら日本海へ。1万2500トンの船だが、結構揺れる。2等船室は床席だけで椅子席はない。後尾のエンターテインメント室でコーヒ-を飲みながら座っていたが、何の催しもなく、退屈。タリンへのフェリーでは、ヘルシンキ工科大学の学生達がカラオケで楽しんでいたのを思いだした。とびきりの北欧美人もいたから、退屈しなかった。2時間半の航海だが、カラオケ設備があれば、日本人も喜んで活用するのではなからうか。

新聞を買って、2等船室でごろ寝をして読んでいるうちに両津港に着いた。11時50分定時。島の東北方向に走る。日本海を右に見ながらの海岸ドライブ。車が少ないので、道路の狭さはあまり気にならない。昼食を採れる店を探したが無いので、二つ亀まで走る。ホテルの食堂で、遅い昼食。海鮮チラシと刺身定食。チラシは品数が豊富。定食には、海草が3種類付いていて、食べたことのないものが1種ある。たずねると、ギンバソウとのこと。海辺の人は、いろいろな海草を食べているものだ。

窓の外には、かぶと岩と二つ亀が見える。二つ亀は、小山状の2連の岩が突出している。食後、キャンプ場の方に回ると、崖下が海水浴場で、細い砂嘴が二つ亀に伸びて地続きになっている。二つの亀の間がどうなっているかは見えない。亀に寺院でもあれば、佐渡の、

モンサンミッシェルだ。

左手遠方には大野亀が見える。大きな小山から、海に向かって先のとがった岩の列が並んでいる。大野亀に走るが、小山の姿しか見えない。二つ亀も大野亀も、海上から見た方が迫力がありそうだ。

二つ亀からは、西に向けての海岸道路。大ザレの滝が落ちている。映像で見る知床の崖から落ちる滝に似ている。佐渡の北岸は、海蝕された岩壁が高く低く続いている。起伏が多く眺望が変化に富む海岸道路は、実に美しい。カナダの赤毛のアンの島プリンス・エドワード島の回遊道路が、世界で一番美しい海岸道路といわれていたので、2001年に走ってみたが、佐渡の方が素晴らしい。

揚島で、尖閣湾遊覧船に乗る。波止場までかなりの下り階段で定刻に遅れたら、出航した船が戻ってきて乗せてくれた。海底が見える仕掛けの小船で、藻や小魚の遊泳が楽しめる。尖閣湾とは、縦の柱状節理のある岩壁が海蝕で奇岩状になった奇景の続く小さな湾で、少し岸から離れると意外に波が高く船が大きく揺れる。船の出入り口の柱につかまりながら写真を撮る。5つの奇岩の説明を聞きながら、湾を一回りして、棧橋に戻る。

水族館もあって、全国でも珍しいというアオリイカの泳ぎを見る。渋谷の活魚割烹で、スルメイカの遊泳は見たことがあるが、身体全体にエンペラを持つアオリイカは、前後左右自由自在で、はるかに泳ぎ達者だ。

相川まで走って、観光案内所で宿の手配を頼む。魚が食べたいといったら、漁師の民宿を紹介してくれた。@7000円を支払ってクーポンをもらい、姫津まで戻って、すだれ荘に投宿。夕日を見たかったので、姫津港の堰堤にかかる姫津大橋にのぼったが、数分遅く、西の海に残照があるのみ。5時が日没だった。

夕食は、刺身、焼いたカレイ、煮たメバルとマダラ、鯖の揚げ物、寄せ鍋と魚尽くしだが、量が多くて食べきれない。もったいないが、大量に残す。夏の海水浴客の食欲を基準にしているのだろう。老齢につき量より質でとあらかじめ頼めば良かった。

久しぶりにパソコンを開いて、日記を書く。

11月1日(火)

朝は、港に散歩。イカ釣り船は出漁した様子はなく、他にも水揚げはしていない。釣り人が一人、何かを釣り上げている。のぞくと小アジが20匹くらいと突堤の上に小フグ数匹。サビキ釣りで、明るくなると小フグが食い始めてアジは釣れなくなるとのこと。

朝食も、魚尽くし。マダラがジャガイモと一緒に煮付けてある。昨夜は、メバルが豆腐と白滝と一緒にあった。野菜などと一緒に煮付けるのがこの島の漁師風らしい。食べたことのない魚は、シイラとのこと。漁港で水揚げされた、黄色がかかった扁平な大きな魚は知っていたが、このような食味とは思わなかった。

漁師の主人は同年齢であることが、床の間の掛け軸で判明。昭和52年に42の厄年を無事済ませて民宿を増築した祝いの軸。第一次オイルショックから立ち直ったところに、増築した民宿営業は、うまくいったのだろうか。長男夫婦と経営しているようだが、海水浴シー

ズン以外は、釣り客程度で、昨日も客はわれわれだけ。客室のメンテナンスも良くないから、成功とは見受けられない。やはり、海を渡る費用がかかる分、集客力は本州の民宿より劣るだろう。

昨日見損なった平根崎の波蝕甌穴群まで戻る。柱状節理が隆起によって斜行したところに波が穴をうがった岩層が広がっている。珍しいようで、国の天然記念物に指定されているが、近くの穴には建築廃材が捨てられていて保存状態は良くない。

また相川方向に戻って、相川郷土博物館に。佐渡金山の歴史資料と特産の裂け織が展示されている。三菱鉱業最後の産金5枚(@1kg)・産銀塊が無造作にケース展示されている。レプリカとは書いていなかったが、盗難対策は大丈夫なのかちょっと気になった。揚水装置(アルキメデスのスクリュウ)のモデルで揚水体験が出来る。立派な髭を蓄えた部屋頭の写真がある。納屋・飯場制度を佐渡では「部屋」と呼んだようだ。2階には、相川出身の有田八郎記念館がある。遺愛品や写真、文書が展示されている。トイレに入ったら、壁から便器までピンク色で、いささかビックリ。悪い趣味だと感じたが、どうやら、朱鷺の島のカラーイメージらしい。

別館が相川技能伝承展示館。裂け織と陶芸の展示室と教室がある。いざり機の変形簡易機で、島内外の愛好者や見学者に裂け織、つまり、つづれ織を教えている。綿花栽培が出来ない島で、古着のリサイクル技術が発達したとのこと。刺し子や紙布、樹皮布など、リサイクル、代用布も展示され実演もするらしい。

佐渡の陶芸は、人間国宝が二人もいるレベル。特有の陶土を使った、常滑焼に似た赤色の陶器が特徴。隣接した窯の売店でひさご型の徳利を探したが無かった。冷酒全盛時代で、爛徳利は冷遇されているようだ。

佐渡奉行所の脇を通過して佐渡金山へ。途中、山を掘り割った道遊割戸が見える。佐渡金山に入場。坑道を下り昇りする間に、動く人形デコレーションがあって、いろいろな採鉱作業が判る仕組みになっている。出口の展示館には、採鉱・選鉱・精錬・小判鑄造の工程模型と坑道立体模型があり、良くできている。坑道高低差は800m程度。地底に長い排水坑道まで掘った。無宿人まで動員した金掘り人足の重労働はさぞやと思われる。

プラスチックの箱に12.5kgの金塊が入っていて、手がようやくはいるほどの穴から、その重さを実感できるコーナーが人気だった。片手の指だけでは少し動かせるくらいで、とても持ち上げることはできない。力持ちがいても、穴は金塊より小さいから持ち帰ることはできないだろう。

大佐渡スカイラインを上る。急カーブの続く2車線道路は、危険だが、車通りが少ないので助かる。楓の紅葉にはまだ少し早いですが、はげ、うるし、つたの紅葉、くぬぎ、こならの黄葉が美しい。

最高点近くの風力発電が1基ある宿泊所売店で、佐渡しゃくなげを一鉢買う。白花だそう数年後が楽しみだ。佐渡スカシユリの球根をおまけに付けてくれたが、軽井沢に植えれば、サルかカモシカの餌食になることは明白。埼玉で育てるしかない。

そこから下りの道路は、防衛庁の管理と書いてある。近くの金北山山頂にレーダーサイトがあるためだろう。対ロシアの守りということか。

島の中央部に下ってから、トキの森公園に行く。分かりにくいところで迷ってたどり着いたが、鳥インフルエンザのせいで、檻には近づけず、展示館の窓越しに双眼鏡で見るだけだった。日本産が全滅したあと、中国産のつがいから生まれた子孫が、いま 80 羽になったとのことだが、わずかに、2 羽が遠望できたのみ。

展示館の説明によると、トキの表毛は白色で、トキ色は翼の羽の裏側にだけ発色して、陽射しの具合で、表面まで透けてトキ色に見えるとのこと。驚いたことに、トキは、自分で、白髪染めをする。胸あたりの皮膚が黒色で、その皮膚を嘴で剥いで毛にこすりつけ、頭から背中にかけて、黒毛に染めるのが、繁殖を迎える雌雄の行動だそうだ。毛染めをする動物がいるとは知らなかった。

道の駅「佐渡能楽の里」で昼食。加茂湖の近くで、ここの養殖カキのフライを食べた。少し味が淡泊な感じだ。イクラながも并なるものは、不思議な味。ナガモというヌメリの強い海草がのっている并は、海のトロロという食感。売店に、ナガモと昨日食べた海草、ギンバソウの乾物があつたので購入。ギンバソウとは、ホンダワラのことだった。ついでに、地酒「菊波」と焼き甘エビも仕入れる。

西に走って、南下、長谷寺に参詣。牡丹が多く、長谷（はせ）寺に似ているが、ここのはチョウコクジが正式名称。訪ねなかったが清水寺も、セイスイジ。都人の流刑地であった佐渡には、みやこを想わせる名称があるらしい。長谷寺には、多宝塔もある。手入れがされないままに、古色がただようたたずまいが良かった。

そのまま南下し、山道を走って紅葉山公園に。楓類を植えた公園の紅葉は美しい。

海岸通りに出て、西に走り、小木港へ。観光案内所で、温泉宿を頼むと、遅いので夕食が準備できないとのこと。それならばと、保健施設「おぎの湯」に投宿（素泊@4500 円）。久しぶりに温泉を楽しむ。ここも簡易保険資金が入っている施設だが、規模は小さい。大規模な佐渡のキャンプの宿は、今年で廃業だが、ここは維持されるようだ。気泡風呂やジャグジー、露天風呂があって、500 円で外来入浴できる施設だから、当今、流行ではある。

風呂上がりの地酒「菊波」は、少し甘口だが美味しい。外に食事にでるのは面倒になったので、食堂で、エビ天井、ほたてかき揚げ丼で夕食。ホタテ貝柱のかき揚げ丼は珍しい。

11 月 2 日（水）

朝風呂。日の出の時間だが、手前に小島があるので海からの日の出は見られなかった。休業日で食堂は開いていないので、売店のインスタントうどん朝食。テレビで宣伝の「どんべい」をはじめ食べたが、麺としては落第。なぜ売れるのか不思議だ。

さらに西に走って、宿根木の千石船展示館に。復元した 500 石積みの和船が、建設した建家のなかに展示されている。記録ビデオによると、完成後、建家から前庭にひきだして帆を張ったようだが、今は、帆柱は倒してある。

竜骨構造を持たない沿岸航路用の和船だが、なかなか頑丈に造ってある。用材を蒸し焼き

にして曲げたり、平板を繋ぐ特殊な釘と工具を用いた、高級な造船技術が使われている。隣接の民俗博物館の旧館は、小学校校舎の再活用。新館には、漁具・農具中心の見事なコレクションが展示されている。

港に下りると、宿根木部落。北前船の重要寄港地であった小木港に近い宿根木部落は、船頭・水夫の村であると同時に、和船建造の拠点で、船大工がたくさん住んでいた。集落は、極端に集中して軒を連ねた構造で、現住のまま、展覧用に整備されている。なかには、三角形の敷地に三角形に建てられた家もある。道なりに板壁が湾曲して建てられ、船大工の技術が活かされているとのこと。バラスト用に瀬戸内から積み込まれた御影石が、水路の橋などに利用されている。

佐渡西端の沢崎鼻を回って東に走る。浜の集落に下りてはまた山道を上るというアップ・ダウンを繰り返す。ここも景色は素晴らしい。途中の入り江を見下ろすと、たらい船でサザエを採る漁師がいる。目を移すと、海中に赤みがかったクラゲの群。越前クラゲが、ここにも集まっている。真野新町から海を離れて内陸を東に。

11時半頃、両津港に着く。佐渡汽船のビルで、すし弁当とおにぎりを購入。カー乗り場に並んで待つ。来る時にのったフェリーが接岸して船首を開き自動車を吐き出す。観光バスが乗客を乗せて出てくるし、郵便小包も車ごと運ばれてくる。コンテナは、待ち受けたフォークリフトが中に入って積んで出てくる。

12時40分、定刻出航。カモメと鳶が船を追う。乗客がスナック菓子を投げて餌付けした結果だ。鳶は早めに戻ったが、カモメはいつまでも付いてきた。陸鳥と海鳥の違いだ。キノコうどんと弁当で昼食を済ませてから、船室で昼寝。来る時より、波が穏やかで揺れは少なかった。

3時、新潟港着。少し迷ってから402号線にのり、海岸線を南西に走る。来る時は雨で見えなかった景色を楽しみながら、寺泊で休止。5時近くで、海鮮市場は店じまいしたくを始めていた。ブリを1本、茹でたのズワイガニ、筋子、ばふんウニ、笹飴などを購入。

暗い道を、直江津へ走り、上越インターから高速道に乗る。柏崎市内を抜けるのに時間がかかり、予定より遅くなった。軽食を取ろうと小布施パーキングに寄るが、食堂は閉店。仕方なく、更埴インターまで走る。一般道でそば屋を探したが、ラーメン店は多いのに日本そば店は少ない。

日本人の嗜好は、昆布・鰹節味から、豚骨味に替わったようだ。アジアにも、アミノ酸系のうま味を好む地域と油脂系のうま味を好む地域とがあるといわれるが、日本人の嗜好は、ますますグローバル化してきている。伝統的な味覚にこだわらないところが、中国人と較べた時の、日本人の特徴だ。中国で食べる外国料理の味の悪さは、料理についての中華思想の現れだと思う。たしかに、中華料理は美味しいが、もうすこし、異国の味に関心を持ってもらいたいと思う。

結局、外食はしそこなって、10時、軽井沢着。寺泊の海鮮で、遅い夕食。ブリ、ズワイガニは美味しかった。ばふんウニは、卵巣が少なく、全く無い粒もあったが、化学処理され

た市販品よりもはるかに良かった。

順徳上皇から、世阿弥、日蓮など佐渡に流された人々に縁ある場所は訪れなかったが、新潟・佐渡への小さな旅、無事終了。

【参考】

2005年10月30日

政治経済学・経済史学会秋季学術大会

於：新潟大学

青山学院大学名誉教授 三和 良一

共通論題

20世紀の戦争と社会変動 経済社会秩序と国家介入

コメント 2 . 20世紀を分析する視座

1 . 共通論題と故加藤榮一

『ワイマル体制の経済構造』（東京大学出版会、1973年）：全体戦争も資本主義の危機のひとつであり、ドイツ革命が、国家独占資本主義の起点になりうる 「早熟的」国家独占資本主義。 同権化論。

「福祉国家と資本主義」（工藤章編『20世紀資本主義 II』東京大学出版会、1995年）：前期資本主義・中期資本主義・後期資本主義。各期資本主義は、＜萌芽期＞・＜構造形成期＞・＜発展期＞・＜解体期＞を経る。戦争・革命・恐慌が、＜構造形成期＞をもたらず。

（三和「宇野発展段階論の可能性 馬場宏二説と加藤榮一説の検討を通して」『青山経済論集』51-4、2000年3月、参照。三和ホームページ <http://www.miwa-lab.org> 公開論文欄に掲載）

2 . 共通論題の概念構造

「経済」「社会」「国家」の概念規定とその相互関連。

Cf. 唯物史観：土台と上部構造・意識形態

T.パーソンズ：行為システム（パーソナリティ・システム、社会システム、文化システム、行動有機体システム）とサブ・システム（A・G・I・L）の設定。部門間相互交換メディア（貨幣・権力・影響力・価値コミットメント）の想定。

N.ルーマン：パーソン・システムと社会システムを区分。社会システムの部分システム（経済・政治・科学・宗教・教育など）区分。諸システム間の相互浸透によるシステム統合。

「経済」「政治」「社会」「文化」の4時空分節化試論

（三和「経済政策史の可能性」『経済政策と産業』年報・近代日本研究 13、山川出版

社、1991年。三和ホームページに掲載)

3. 20世紀資本主義の普遍性と個性

共通論題構成メンバーの「20世紀資本主義・現代資本主義」観の異同。

「20世紀資本主義・現代資本主義」は「普遍性」・「一般概念」・「資本主義の発展段階」として把握できるのか？

(三和「資本主義の発展段階 経済史学からの接近」『資本主義はどこに行くのか』東京大学出版会、2004年)

各国の「20世紀資本主義・現代資本主義」の「個性」は、何によって規定されているのか？

4. 政策と政策決定過程

共通論題諸報告の、政策提案の背景の解明は、興味深い。

政策決定過程の分析方法を明確にすることは経済史分析に有用ではないか？

(三和「経済政策史のケース・スタディ 松方財政」、『青山経済論集』54-3、2002年。三和ホームページに掲載)

5. 戦争「と」社会変動

戦争を「与件」として「結果」としての社会変動を把握するのは、ひとつのアプローチである。

社会変動を「与件」として、戦争をその「結果」として把握するアプローチもあり得る。

戦争と社会変動の相互関連を把握する作法も、可能ではないか？

戦争原因論の経済史からの接近方法は？

6. 資本主義批判の視座

「武力によるアメリカの世界支配はその正統性を問われることなく、グローバリゼーションを推し進めて世界的規模で福祉国家システムの解体を促している。こうして世界は正統性なき統治とカジノのように不確実な経済の時代をなお当分の間生きていかなければならないのである。」(加藤榮一「二十世紀福祉国家の形成と解体」『資本主義はどこに行くのか』)

「20世紀型の資本主義が終焉し、新しい資本主義の時代が始まったという認識は共通であるが、転換期の只中にある以上当然のこととはいえ、新しく作り出される社会経済の形質について共通の明確な構図を描き出すには至っていない。ただ少なくともいえることは、現在の変化のトレンドがこのまま持続し、あるいは加速して行けば、市場経済の「悪魔の碾き臼」(K.ポラーニ)が人々の生活を踏み碎き、地球環境を破壊して、人類がこれまで経験したことがないような不確実な状況が招来されることは間違いなさそうである。われわれは荒野に呼ばれる預言者ではないので、人々に悔い改めよと説くつもりはないが、幸いにして本書が多くの読者を得て、その厳しい批判となにがしかの共感を享受することができれば、それを土台にして、優勝劣敗を唯一の正義とし、際限のない欲望を生み出すマモン信仰に支配された世界的時流に抵抗する対抗的理念、対抗的文化を形成する手掛かりを探り当てたいというのが、本書を刊行した7人の共通する願望である。」(「はしがき」同

上書)

Ecological Footprint : 人間が消費する生物資源を供給する土地面積と化石燃料の排ガスを吸収するに必要な森林面積の合計。1961年には、地球の供給可能量を1として0.5程度、1980年代後半に1を越え、2001年には1.2に達した。(Global Footprint Network ,<http://www.footprintnetwork.org> 試しに : Your Ecological Footprint , <http://ecofoot.org>)

石油の採掘可能年数 : 既発見埋蔵量を年間採掘量で除した数値。46.5年(OPEC統計、2003年)。

先進諸国では、**マイナス成長**が必要。

マイナス成長は、どのように実現できるか？

経済史学による資本主義の高度経済成長体質の歴史的解明は、マイナス成長への道を示唆する。

(三和「資本主義経済は何故速く成長するのか - 資本主義は何なのか - 」、『青山経済論集』53-2、2001年。三和ホームページに掲載) 以上